

## 令和2年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属小学校	校長名	甲斐 雄一郎
幼児・児童・生徒数（R3.3.1現在）	758	学級数	24
2 教育目標等			
① 学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人間としての自覚を深めていく子ども</li> <li>○文化を継承し創造し開発する子ども</li> <li>○国民としての自覚をもつ子ども</li> <li>○健康で活動力のある子ども</li> </ul>		
② 学校経営方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全校職員の協力のもとに全人教育を目指す。</li> <li>○グローバル人材育成のための先進的教育を目指す。</li> <li>○インクルーシブ教育システムにおける教育モデルの開発・実践に取り組む。</li> <li>○第3期中期計画に積極的に取り組み、小・中・高と大学との連携に基づく先導的研究（小・中・高一貫カリキュラム開発と実践プログラム）を行う。</li> <li>○本校の特色である小学校における「教科担任制」を充実させ、実験的・実証的に授業を展開し、「公開授業研究会」の開催、「教育研究」誌の刊行等を通して、これからの日本の小学校教育モデルをつくる。</li> <li>○スリム化したカリキュラム（40分授業等）の編成、教科横断的な機能を高めた総合活動（STEM<sup>+</sup>）を取り入れたカリキュラム編成の研究に取り組む。</li> <li>○現職教育の拠点校を目指すと共に、海外に積極的に教育実践の発信を行ったり教育技術交流を行ったりして、小学校教師教育の国際的拠点校をめざす。</li> </ul>		
③ 重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 全人教育をめざす 小学校では、教科内容を発展的に学ぶ態度を育成するとともに、運動や体験的な活動を重視し、知・徳・体の統合的な教育を推進する。</li> <li>② グローバル人材育成のための先進的教育をめざす。 「STEM<sup>+</sup>」のカリキュラム編成を推進し、国際理解教育、英語教育、情報教育等の観点から、グローバル人材育成のための方向性を探る。また、セキュリティを高めたネット環境・ICT環境をさらに整備し、積極的活用と研究を推進する。</li> <li>③ インクルーシブ教育システムにおける教育モデルの開発に取り組む 附属11校と連携を図りながら、インクルーシブ交流の教育モデルの開発に協力する。</li> <li>④ 未来10・20年を見通した将来構想の構築と共有化 小・中・高、さらには特別支援学校との連携を深めると共に、本校の存在意義を明確にするために、将来構想委員会を立ち上げ、将来構想の共有化を図る。</li> <li>⑤ 新しいカリキュラム編成をめざす 小学校における「教科担任制」の教育的な機能を高めると共に、カリキュラムのスリム化（40分授業等）を図る。文部科学省の研究開発学校の指定を受け、これからの日本の小学校教育モデルをつくる。</li> <li>⑥ 教職教育の拠点校をめざす 全国の小学校教育のモデルになるような試みを行う。「公開授業・研究会」の開催、「教育研究」誌の刊行、「各地研究会・研修会」への協力等を行う。 教員免許状更新講習に当たり、6月に1回、7月に1回、9月に1回、合計年3回講習を開き、積極的に取り組む。 小学校教職課程の設置に伴い、本校で教育実習の充実に努める。</li> <li>⑦ 国際教育協力の貢献をめざす 引き続きJICAやAPECへ協力すると共に、韓国、タイ、スウェーデン、デンマーク、スイス、ポルトガル、ハワイとも継続した研究を推進するとともに、算数、理科だけでなく、幅広い教科教育との国際連携を目指した「授業技術交流会」も開催していく。 また、今後ともオリパラ教育プログラムの開発を継続して取り組む。</li> </ul>		

<p>④ 前年度（令和元年度）の成果と課題</p>	<p>① 先導的教育拠点として 小・中・高の連携を深めながら一貫カリキュラム開発研究を行ってきた。四校研では、「グローバルな素養を育てるカリキュラム研究」を進めている。 校内研究では、「きめる学び」というテーマのもと子どもの意思決定の瞬間に着目した授業改革に取り組み、その成果を発表した。また、新テーマ「『美意識』を育てる」にも着手した。本校の特色の一つでもある「教科担任制」を活かした研究を継続し、小学校教育の新たなモデルとなるようその成果を年2回の研究会等で発信することを継続していく。</p> <p>② 教師教育拠点として 初等教育の理論と実践についての研究をすることにより、その成果を一般小学校教育の参考に供した（「研究紀要」No.75参照）。 各教科・道徳・総合活動・外国語活動に関して、教材開発、指導法、教具等の開発をし、本校発刊の月刊誌「教育研究」や、学習公開・研究発表会（6月14・15日）、初等教育研修会（2月14・15日）を開催して発信することができた。 また、筑波大学初等教育コースの学生や看護学類生の教育実習に協力した。さらに、全国各地から派遣される現職教員研修生、及び海外教員の研修生に対して、教育研修、研究実践、協同研究等の講師として指導・助言を行った。 筑波大学の教員免許状更新講習に積極的に取り組み、約120名の受講生に講義と試験を行い、授業を中心とする講習に好評を得た。</p> <p>③ 国際教育拠点として 令和元年度も、JICAの関係者や、APECの関係者、さらにはオーストラリア、スウェーデンなど、諸外国の約200名以上の参観者があった。 10月に予定していた「日韓授業技術交流会」は、日韓の政治的対立の影響を受け、見合わせる事となった。情勢を注視しながら、再開したいと考えている。 北欧諸国との授業研究交流会は継続して行われた。デンマーク、ポルトガルで研修会を開催した。さらに周辺諸国からの提携の申し込みもあり、検討しているところである。</p> <p>④ その他 地域協力として、文京区教育委員会の主催する学力向上プログラムへの協力、近隣校の教員の日常的授業参観受け入れを実施した。 特別支援教育との連携に関わって、附属大塚特別支援学校と協力し、保谷教場における合同の芋掘り行事を例年通り継続して行っている。また、本校児童が大塚特別支援学校の行事に参加し交流も行った。 迫る東京オリンピック・パラリンピックへの教育と関連した教育プログラムの内容を、充実させていきたいと考えている。</p>
---------------------------	--

<p>3 重点目標達成についての総括的評価</p> <p>令和2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、休校措置がとられた状況の中で始まった。また、学校の再開後も感染防止対策に多くの時間を割くことになった。しかし、そのような状況下において何ができるかを考え、実践を通じた研究を積み重ねることができた。</p> <p>家庭学習の期間が長くなったことから、オンラインを活用した課題配信や双方向の情報交換について、試行錯誤しながら、いくつかの方法を確立することができた。PCなどの端末を用いた学習の可能性も少しずつ広がっている。</p> <p>一方では、人と人が直接会って交流を深める場が設定しにくくなったために、インクルーシブ交流や海外の教師や児童との交流の場をもつことができなかつた。お互いの見方や感じ方を交流させながら、それぞれのよさを取り入れていく場を、オンラインなども活用しながら増やしていけるよう工夫する必要があるようである。</p> <p>校内研究のテーマ「『美意識』を育てる」と関連させながら、各教科・領域の指導内容や指導方法について見直しが図られている。この過程の中で見えてきたカリキュラムの柱を整理することによって、現行のカリキュラムは整理され、スリム化（40分授業等）につながるものと考えている。</p> <p>また、「STEM<sup>+</sup>」の考えを取り入れた総合活動については、各学級の取り組みをお互いに紹介しながら、活動の幅を広げることができた。</p> <p>これらの研究への取り組みや成果については、「研究発表会」（オンライン開催）や「教育研究」誌を通して、全国に発信している。さらに、全国各地から講師として招聘された際に、実践事例を交えながら提案し、そこでいただいた意見もその後の研究に生かしている。</p>
---

#### 4 令和3年度の学校課題

令和2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために、多くの学習活動や行事の中止や延期を余儀なくされた。今の状況がしばらく続くことを考えると、この状況下において何ができるか、何を大切にすべきかを改めて考え直し、本当に必要な活動を精選し、それぞれの内容を充実させていくことが求められる。

本校の使命を再確認し、先導的教育拠点校としての役割を十分に果たせるように、他の附属との連携を深めながら、将来の教育のあり方を見据えた研究を継続し、発信していかなければならない。

本校の教育研究のシステムは、それぞれの教科の独自性の共生・共創によって保たれてきたと言える。しかし、独自性が高いがゆえに、教科横断的な指導カリキュラムの構築が難しい現状になっていたことは否めない。

現在、総合活動では、「STEM<sup>+</sup>」の発想を取り入れた活動を多く取り入れ、教科横断的な指導法の研究に取り組んでいる。このような新しい視点を取り入れることが、新しい総合的なカリキュラム編成へとつながるはずである。このことを実践研究を通して明らかにしていかなければならない。

また、コロナの感染状況を見ながら、インクルーシブの視点からの活動や海外との交流も再開する必要がある。

#### 5 学校課題に向けての具体的な取り組み

各行事について、その目的を見直すとともに、新たな可能性を探っていく。また、日々行われる授業については、各教科の意義を見直し、その質をさらに高めていくことは、当然のこととして継続していく。そこで得た知見を、校内研のテーマ「『美意識』を育てる」につなげていく。また、「STEM<sup>+</sup>」の具体を探りながら、様々な活動に試行的に取り組んでいく。

国際交流に関しては、提携を結んでいるデンマークからは再開を望む声が届いている。さらに、イギリスなど、場所を広げたいという要望もある。諸外国の授業の様子を参観したり、カリキュラム等の実情について情報を交換することは、日本の教育を考える上でも参考になる。オンライン開催の可能性も含めて、今後も継続していきたいと考えている。

また、GIGA スクール構想に伴う ICT 環境の整備にも取り組み、教育活動をより充実させていくことが求められる。

#### 6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- 『研究紀要』第76集（著：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
  - 『教育研究』令和2年5月号～令和3年4月号（編集：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
  - 2020年度『初等教育研修会』要項（著：筑波大学附属小学校・一般社団法人初等教育研究会）
  - 『板書で見る全単元・全時間の授業のすべて 算数1年下～6年下』（筑波大学附属小学校算数部企画・編集）東洋館出版社
  - 『小学校国語「深い学び」をうむ授業改善プラン—説明文／文学—』（著：筑波大学附属小学校国語部）東洋館出版社
  - 『子どもを読書好きにするために親ができること』（著：白坂洋一）小学館
  - 『整理整頓の算数の授業』（著：山本良和）東洋館出版社
  - 『クラスづくりで大切にしたいこと』（著：盛山隆雄）東洋館出版社
  - 『授業UDを目指す「全時間授業パッケージ」国語1～5年』（編著：桂聖、小貫悟、日本授業UD学会）東洋館出版社
  - 『対話でつなぐ体育授業51』（著：齋藤直人）東洋館出版社
  - 『子どもが世界に触れる瞬間』（著：笠雷太）東洋館出版社
  - 『算数授業を子どもと創る』（著：森本隆史）東洋館出版社
- 等

# 学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和2年度

学校名

筑波大学附属小学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-1	説明、板書、発問など、各教員の授業の実施方法	<p>本校では、月1回の校内研究会において授業研究会が行われる。研究協議会では、専門教科の垣根を越えて厳しい議論が繰り返される。また、学年部内などお互いの授業を公開し合い、授業づくりの方法について自主的に勉強会を開いている。その中で、教師の指示・説明・発問、板書力といった教育技術についてより高いものを求めている。</p> <p>また、各教科の特性、教師の個性を尊重し、仮説検証型の研究スタイルにこだわらない多様な研究手法を導入することで、各教科・各教師の独自性を生かした研究が進められている。</p>
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	<p>「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、導入部分での児童の問題意識を高める指導を重視した授業づくりを大切にしてきた。また、教材開発はもちろん、学習形態の工夫、ICT機器の有効な活用により、協働的な学びの実現を図ることができた。</p> <p>コロナ禍であっても、感染防止対策を取りながら、実際に体験したり、お互いの意見を交流させ、合意形成を図ったりする場を積極的に取り入れるようにした。</p> <p>本校では教科担任制をとっているが、それぞれの専門分野を超えた議論が校内研究会などの研修を通して、児童の興味・関心を高めた自主的・自発的な学習を実現することができた。</p>
1-2-2	児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組の状況	<p>コロナ禍のため、年度初めは休校措置がとられ、各家庭の状況がわからぬまま、教材を郵送したり、オンラインを使った課題配信、双方向のやりとりをしたりしながら学習が進められた。また、授業時数をできるだけ増やすために、夏休みを短縮するなどの措置を講じた。行事が少なくなったこともあり、授業時間が確保でき、前学年の3月の内容も含め、各教科の学習内容について定着を図ることができた。</p> <p>体力面においては、休校期間に家での時間が増え、登校時間が減ったこともあり、登校が再開されたときには、筋力や持久力の低下が心配された。コロナへの対応策がわかってくるにつれ、運動の機会や運動量も増え、だんだんと体力が戻ってきたと感じられる。</p>
3-1-2	問題行動への対処の状況	<p>各学級で生じた児童の問題行動については、当該学級の学年部やその学級の専科教員との情報交換はもちろん、早い段階で専門家（スクールカウンセラー等）と情報を共有し、保護者と連絡を密に取り合いながら解決に当たっている。</p> <p>また、児童指導会議を職員会議の後に設定し、月2回定例化して開催している。多くの教師間で情報を共有することで、組織的に問題を解決できるようにしている。状況によっては、附属学校教育局の協力を仰ぎながら指導に当たってきた。</p>

3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	<p>コロナ禍のために、多くの行事が通常通りに実施できなくなった。その中で、子どもたちが自主的な取り組みを見せた。</p> <p>例えば、運動会では自主的に新しい種目を考えて取り組んだり、きょうだい遠足では保谷農園教場での活動をいろいろと工夫したりした。また、学校のために自分たちができることを考え、校内美化などに取り組んだ。</p> <p>コロナの感染防止策も考慮しながら、周囲の人たちに配慮しつつ、自分たちに何ができるかを考え、課題を一つずつ乗り越えていけるよう、助言を心がけた。</p>
4-1-3	法定の学校保健計画の作成・実施の状況、学校環境衛生の管理状況	<p>保健主事の養護教諭と保健担当の主幹教諭が中心となり、毎月行われる保健部会において計画の遂行状況を確認し、児童への指導、担当各教諭への連絡を随時行った。</p> <p>新型コロナウイルス問題では、学校医の指導を受けながら感染防止計画を立案し、全職員の協力のもと感染防止の準備を進め、実行することができた。</p>
6-1-1	特別支援学校や特別支援学級と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	<p>コロナの感染拡大の影響により、長年継続している大塚特別支援学校との交流活動は実施できなかった。また、三浦海岸合宿も行われなかったため、貴重な経験をすることができなかったのは、非常に残念なことである。</p>
11-1-1	学校運営へのPTA（保護者）、地域住民の参画及び協力の状況	<p>若桐会、後援会における学校への支援活動は、他に類を見ない強力な体制である。</p> <p>若桐祭は、コロナ禍のために通常通りに開催できなかったのだが、役員をはじめ保護者の方々の知恵と努力によって、オンラインによる開催を実現できた。</p> <p>このような積極的なサポートによって、児童の学校生活は大変充実したものになっている。</p> <p>また学校評議委員会では、地域の方、本校のOB、大学など有識人などに関わっていただき、多様な視点からのアドバイスをいただくことができた。</p>
14-1-2	大学との連携・協力	<p>四校研では、小学校、中学校、高校、大学の各教科専門家で集い、グローバルな素養が育つカリキュラム編成と実際の授業のあり方について議論することができた。</p> <p>また、本校の研究発表会（8月）においては、教科・領域によっては、分科会指導助言者として附属中・高の先生方や筑波大学の先生方に参加していただき助言を受けた。</p>
14-1-3	先導的教育研究	<p>毎月1回の校内研究会では、研究授業や講演会を行った。研究テーマ「『美意識』を育てる」に基づき、その具体的な指導方法についての研究授業を繰り返しながら、研究の成果や課題を明らかにすることができた。</p> <p>そこで得た知見を研究紀要にまとめ、8月の研究発表会で発表した。さらに、月刊誌『教育研究』等で広く教育現場に提案することができた。</p> <p>さらに、文部科学省の指定も受け、カリキュラム研究にも取り組んでいる。また、総合活動では、「STEM+」の視点を取り入れた活動についても実践を積み重ねているところである。</p>

14-1-4	教員養成・教師教育	<p>合計3回の教員免許更新講習を予定していたが、コロナ禍のため、開催を見合わせた。本校で行う講習は、教師と児童による実際の授業を参観することができ、その事実をもとに研修を深めることができると好評なので、次年度は再開したいと考えている。</p> <p>「研究発表会」は予定を延期して8月に、「初等教育研修会」は予定通り2月に、オンラインにて開催することができた。全国から多くの先生方が参加され、様々なご意見や感想をいただくことができた。今後の研究に生かしていきたい。</p> <p>各都道府県教育委員会等から講師派遣依頼があったのだが、コロナの影響により、その多くを断らざるを得なかった。年度の後半になると、オンラインによる講演会や指導助言の機会も設けられるようになり、日頃の研究の成果を発信する場も増えてきた。</p> <p>教員養成については、大学の初等教育学コースの授業において、本校の教員が学生の指導に当たっている。また、教育実習の受け入れも行っている。</p>
14-1-5	国際交流・国際貢献	<p>4年生の希望者を対象とした「日米児童交流会」は、コロナの影響により、実施できなかった。</p> <p>筑波大学留学生との交流会は、オンラインを利用することによって、何とか継続できた。交流をするまで知らなかった国についても、関心をもつことができた。</p> <p>「日韓授業交流会」や「北欧授業研究会」については、相手側から開催希望の打診はあったが、コロナの状況が好転しなかったために、実施は見合わせることにした。状況が許せば、引き続き、交流を深めていきたいと考えている。</p>